慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	費信の見聞した十五世紀初頭の南海漁事 : 漁業資料としてみた「星槎勝覧」の價値
Sub Title	On the fishing of the Pacific and Indian Ocean in 15th century informed by Fei Xin (費信)
Author	可兒, 弘明(Kani, Hiroaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.33, No.1 (1960. 12) ,p.59- 70
JaLC DOI	
Abstract	"Fei Xin " (費信) was a Mussulman in Ming Dynasty, who was sent abroad several times as one of the interpreter of "Cheng Ho" (鄭和), an envoy of the Imperial China. Based on his observations of foreign land, he wrote a book entilled "Xing Cha Sheng Lan" (星槎勝覧), tne preface of which was dated A. D. 1436. His book abounds in comments of salt-making, saying, "they boil down the brine and get salt "(煮海爲鹽). But he says nothing about evaporation of sea water under the fiery rays of the tropical sun. Salt-making might be the important way of sustenance of daily life for the southerners. Exactly the same information is given in "Dao Yi Zhi Lue" (島夷誌略), a work of 14th century by "Wang Ta-yuan" (汪大淵). He has the following discourse under the heading of Tanjang Datu (都督岸) of Burneo. "Prohibit the people from boiling down the brine to get salt during the first three days of New Year". I think that the salt-manufacture was not only purely economic pursuit but also had it's social and religious meaning. Treating of the dugout canoe, the comment is so piecemeal as to be not worth special mention for us. About ambergris which was nightly prized as one of the exotic perfume in Sung and Ming Dynasties, he explains as follow,"Steering the dugout canoe, the inhabitants go to Bras isl. (龍涎嶼) where they collect ambergris". Moreover, he records the names of place which is famous for it's prodution of ambergris. Amongst them, we can name al-Ahsa, Zafar, Jubb, Brawa and Maldives. In refrence to net fishing, only the fragmentary informations are found in his book. "The Natives of Cap Varella, Malacca, Samudra and Nicobar catch sea fish by using net". But he does not explains anything about detailed resources. Merely under the heading of Samudra, he says "To net fish is their daily life; fishermen get into canoe at dawn, setting sail on open sea, homeward bound at sunset ". Judging from this passage, net fishing was obserbsd by the whole members who were obliged to live together. As to the fishing for pearls, there are several places of production such as Ceylan, Sulu, Bangala, Mecca and Ormuz. According to hiscommentary on Ceylan (錫蘭山國), the book gives the following imformation; "there is a sea where the pearl oysters congregate; they use to net oysters; the pearl oysters are put into the pond to expedite the process of rotting", (其海傍有珠簾沙. 常以網取螺蚌. 傾入珠池内作爛淘珠). The fame of Ceylon pearl banks goes back in the T'ang (唐) or Sung (宋) period for the Chinese. Statement concerning the fishing for pearls in Ceylon is also found in another Chinese sources. "Wang Ta-yuan", author of "Dao Yi Zhi Lue", has the following explanation. "The diver holds a stone to aid him in his rapidly descent to the bottom, where he rakes the oyster by hand and put them in the basket" (繫石於腰放墜海底.以手爬珠蚌入袋中). Pearl fishing, anywhere and anytime, depends not so much on net as on divers. Fei Xin's information, saying "To net the pearl oyster (以網取螺蚌)", is not correct. Perhaps he confounds the net with the basket in which the pearl oysters are brought to the surface. It is also misrepresentative that tells us "Oysters are placed into the pond". Chau Ju-kua (趙汝𠔃), in his Chu Fan Chi (諸蕃志), in 1225, has the following discourse on this subject under the heading "pearl". They make a pit in which the pearl oysters are piled. At the end of a month, knead and wash the refuse to find the earl. According to Woolf, B. S., in Ceylon to-day, to expedite the process of rotting, so that the pearls may be more easyly extracted, the oysters are piled into dugout canoe and covered with matting for a week. Wang, in his work, has a explanation as follow. "The oysters are piled into canoes. These canoes heel over under the weight of pearl oysters. Shipping the cargo-pearl oysters, government officers in his boat escort them. At the end of several days little is left except slime, pearls, shells. Then they wash the refuse in which the pearls are imbedded", (以珠蚌傾舟中.既滿戴則官場週回皆官兵守之.越數日候其肉腐爛則去其殻以羅盛腐肉旋轉洗之.則肉去珠存). The representation expressed in Dao Yi Zhi Lue is shared by Fei Xin in his work. When he cites the passage from Zhi Lue, he mistakes that "boat heels under the weight of pearl oyster (以珠蚌傾舟中)" for "pearl oysters are put into the pond" Beside, according to Woolf's report, an Arab diver in Ceylon fishery wears a nose-clip when diving, the Tamil hold his nose with finger and thumb. The only Chinese author who has treated of this kind of method is Chau Ju-kua, saying, "they fill their nose and ears with wax" (以黄臘塞耳鼻).
Notes	

Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19601200-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

費信の見聞した十五世期初頭の南海漁事

（漁業資料としてみた「星槎勝覽」の價値）

可兒弘明

明代に太監鄭和の南海遠征のことがあつてから、支那人の南海に關する知見は大いに進んだと思われる。その一つのあらわれとして南海の地誌がつくられるようになつたが、鄭和遠征それ自體がこれまた南海の地誌を生んだ。一つは費信の「星槎勝覽」であり、他の一つに馬歡の「瀛涯勝覽」をあげることができる。著者はいずれも當時の支那回教徒であつて、通譯として遠征に加わつたと稱せられている。この兩書は、元代の一三四九ないし一三五〇年ごろ成立したと思われる「島夷誌略」や、あるいは宋代における「嶺外代答」・「諸蕃志」・「桂海虞衡志」とならんで、いわゆる西力東漸以前の南海諸國の事情を傳える好資料と目されている。民族學の面からみてインド文化・イスラム文化・漢文化の影響をうけながらも、なお基層文化をそれぞれ失わずにとどめていた時代の南海の姿が、かなりの興味をひきおこすのである。こうした價値は相當高く評價されてよかろう。

しかし實際に利用する時、これに十分の檢討を加えねば却つて誤つた結果におちいるのであつて、たとえば藤田豐八博士が「大小葛蘭考――星槎勝覽の價値」（東西交涉史の研究　南海篇）において、「星槎勝覽」における「島夷誌略」の

抄襲綴拾や臆見附加の事實を指摘されたごとく、また內田幹之助氏が「南海に關する支那資料」において「星槎勝覽」の淡洋・龍牙門・彭坑・吉理地悶・勃泥・蘇祿國の諸條に、同じような「島夷誌略」の抄襲、綴拾のあることを述べられているごとくである。

「星槎勝覽」はこうしたわけでその記述の一部が既に不評判なのであるが、いま一つの別な點つまり內容のとぼしいことでも致命的な弱點がある。以下、漁事に關する記述によつてそれを概觀するとしよう。

「星槎勝覽」の著者費信は、字を公曉といゝ、その祖は吳郡崑山の民であつた。前述のように支那人回教徒で、二十二才の時えらばれて通事となり、太監鄭和に從つて諸外國に赴いた。七回にわたる遠征のうち費信が實際に從事したのは第三回（永樂七年十二月より同九年六月）、第四回（永樂十年十一月より十三年七月）、第七回（宣德五年十二月より同六年）および第三回と第四回の間におこなわれた永樂十年の奉使少監楊敕によるベンガル招撫、以上の四次にわたつている。まず十五世紀初頭の見聞といえよう。この間みずから實見した諸國を前集に收め、傳聞に屬する諸國を後集として「星槎勝覽」二帙を集成した。「島夷誌略」におくれること約七十餘年、「諸蕃誌」の成立後ほぼ二百年を經ていた。

さて、この「星槎勝覽」收載の南海諸國のうちから、漁業に關係する部分を左に抄出し、事項ごとに整理して、もつてその記事がいかに簡略きわまりないものかを示すとしよう。

(1)　海水鹽の採取

費信がどのような興味をもつて記錄したかはこれを知るべくもないが、比較的多く記述されたのは鹽の產地である。近年におけるインドシナの例に照らしてみてもわかるように、大衆食糧は米と獸肉魚介を主とする動物性窒化物であ

り、これが調味料としては一部に香料および大豆醤油も用いられたが、大抵は魚より製した魚醤 Nuoc-mam と魚の鹽漬である。他のアジア季節風帶の民衆も同じように賞用する關係上、漁獲物の鹽藏または鹽處理は、東西洋（とくに南海）の一つの地域的特色ともいえ、インド洋方面の乾燥魚の存在とともに今後にのこされた大きな研究分野である。

ともかく海水を煮つめて食鹽をうる漁業が各地に盛行していたことは當然のことであるが、「星槎勝覽」に擧げられた順に地名をひろつていくとする。

占城國、すなわちシャンパの條下に「以レ煮レ海爲レ鹽」といい、さらに「一國之食、魚不ニ腐爛ニ不レ食」と述べている。安南の鹽漬魚は住民がこれを愛好し、食膳に上すのであるが、その臭氣嘔吐を催させることにおいてとうてい外國人の耐えうるところではないので、これを見聞した費信は、占城人は魚が爛爛しなければ食べぬものであると考えたのであろう。こうした鹽漬魚の關係からも多量の鹽の需要があつたはずであつて、されば「煮レ海爲レ鹽」を彼等が行うのである。濕度過多の季節に海水鹽は自給できぬし、雨期もまた生產をはゞまれるが、インドシナではラオス諸州の岩鹽をのぞいてことごとく海水鹽に賴つてきた。とりわけ東京、北安南、中部安南、交跡支那の鹽田は今日でも大規模なものが存在しているが、「星槎勝覽」にもそれをうかがうことができる。卽ち眞臘國 Kamboja、暹羅國 Siam に關する記事の中にも海水を煮て鹽となす、という一事が記載されている。

煮レ海爲レ鹽という簡略な表現によつて海水鹽採取の事實が示されている地域は、上述した占城、眞臘、暹羅三國のほか、

蘇門答剌 Samudra　龍牙犀角 Lenkasuka　東西竺 Pulo Aor　龍牙善提 Langkawi

彭坑國 Pahang　琉球國 Formosa　三島 Philippine　麻逸國 Mindro

假里馬打 Karimata　重迦羅 Jangala　渤泥國 Burneo

など南海各地にわたるのであるが、そのいずれについても製鹽法の具體的記述が備錄されていない。いわゆる當時の西洋諸蕃のうち、卜剌哇國 Brawa で費信は鹽池に樹枝を投じ鹽の白い粉を吹かせる方法に接し、これを

有二鹽池一、但投二樹枝於池一、良久撈起、結二成白鹽一、食用

と筆にとどめ、その詩に「鹹水結爲鹺」といつているくらいの興味を寄せている。おそらく南海の製鹽法は支那明代のそれと類似し、ことさら特記するほどのものがなかつたからであろう。いずれにせよ、東西洋を通じて擧げられているおびたゞしい土產・貨物のなかに鹽が特記されていないことは、南海の鹽が自給自足、あるいは生產量が需要量を上廻つても、下廻つてもそう大した量でなかつた事情を間接に示している。

(2) 獨木舟

ここで漁業に關して當然深いつながりを有した獨木舟についてみると、スマトラ、ブラス島（龍涎嶼）、ニコバル島（翠藍嶼）、アルー國（阿魯國）などの記事に、獨木舟ないし獨木刳舟の字句がみうけられるが、われわれが獨木舟について知りたいと思うさまざまなことに關して、「星槎勝覽」の著者費信は貝のように口をつぐんでいるのであつて、これに一片の期待をよせることすら困難である。

(3) 龍涎香の採取

龍涎香すなわちアンバー・グリスの採取はスマトラからインド洋諸島にその記載があるが、既に前島教授の研究があ

るので記述を省く。

(4) 網漁業

網漁に關する具體的な記事を拾いあげてみると左のようである。

まず靈山 Cap Varella に星散して居住する民は「結レ網爲レ業」しており魚蝦を海内に求むと記している。靈山は占城の山地と連接する峻嶺で、安南富安省 Phu-Yen の臨海地帯であり、明代の販船は必ずここに寄航して飲料水を積込んでいたようである。その關係からか彩色船を水に流して人船の災を禳う行事のあることが「島夷志略」にみえている。田土が肥え「耕種一歲二收」の土地であつたと同時に、網を用いて漁業を行い、それを生業とする住民のあつたことがわかる。

次いで滿剌加國すなわち Malaka の國人も、「以レ淘釣二於溪一、網漁二於海一」とあるが、紀錄彙編本には「民淘レ錫網レ魚爲レ業」とあり、前者の方が明解である。これに從えばマラッカ方面の住民に網漁をもつて生業としていた漁民のあつたことも知れるのである。

スマトラ方面について、蘇門答剌國の傍海村落にやはりフイツシャーマンとして生業を立てゝいるものを見聞し、

民下網レ魚爲レ生、朝駕二獨木刳舟一張レ帆而出レ海、暮則回レ舟。

と記錄にとどめている。この一文にわれわれは最もテイピカルな南海漁民の姿を求め、伊映畫「最後の樂園」のワンカットを想起させるのである。馮承鈞はこの蘇門答剌國を今のスマトラ島西北パセ河沿岸に比定している。

さらにインド洋に出てからの見聞では、翠藍嶼つまりニコバル島民は芭蕉・椰子・魚蝦だけで生活しており、その魚

蝦は「惟在レ海網捕二漁蝦一」、海に出て網を下して捕採するのだと記している。

錫蘭山、セイロン島の部分では螺蚌を網でとることを記し、漁業に關しては「星槎勝覽」中もつとも注目すべき記述がなされているが、これについては後述する機會もあろう。この他溜洋國マルディーヴ群島は「不レ識二米穀一、但捕二海中魚鰕一而食」とのべ、魚鰕をもつて主食としていることを記錄しているが、漁獲法にまで記述が及んでいない。ただ西曆一三四三年より翌四四年八月ごろまで同島にあつたイブン・バットウータの記錄を參考にしてみると、鰹釣のように思われる。バットウータ旅行記の唯一の邦譯書である前島信次教授の「三大陸周遊記」に、

スワイドから黍に似たものがとれるほかは大體穀物はないので、島民の主食はクルブル・マースという魚ややしの實である。この魚の肉は赤くて脂がなく、羊肉に似た臭がする。これを釣ると、四つ切りにし、ざつと煮てから、やしの葉の籠に入れて燻製にする。よく乾いてから食べ、またインド、シナ、ヤマン等に輸出する。

とあつて、「星槎勝覽」の簡略さをかなり補つているのである。くどいようであるが、東洋の鰹節に關する文獻になるので、フサインの英譯を示しておくと、[註1]左のようである。

In all these islands there grows no grain; only in the Suwaid region is to be found a kind of grain which resemble 'anli' and is exported from there to Mahal. The food of the inhabitants is a fish which is simular to lyrūn and which they call qalbalmās. Its flesh is red and has no grease and smells like mutton. When it is caught the fish is cut into four pieces, cooked a little, placed in baskets of palm leaves and hung over a smoke. When it is throughtly dry it is eaten. It is exported from the Maldive islands to India, China and Yemen; it is called qalb-almās.

ともかく明記されていないが、網漁ではあるまいと思われる。インド洋ではアラビヤおよびアフリカ方面に關して二、三の記載がなされているが、とくに重要とも思われないので、再び南海諸地域に筆をもどそう。

「星槎勝覽」後集で麻逸國即ちミンドロ島 Mindoro isl. および假里馬打 Karimata の土産に玳瑁が擧げられているが、これまた捕採法については記述が及んでいない。ただルソン島南方洋上の三島、Calamian, Palawan, Busuanga の條下には網漁に關する部分がわずかにあつて、「以レ網魚二於海一、織レ布爲レ業」とのべられている。

(5) 眞珠漁業

眞珠の採取についての記述は錫蘭山すなわちシーランないしセイロン漁場と、蘇祿國すなわちスールー群島漁場、榜葛剌すなわちベンガル漁場、さらにペルシヤ灣漁場を示すと思われる天方國すなわちメッカおよび忽魯謨斯オルムズの五地域が擧げられている。しかしながら

錫蘭山國　其海榜有二珠簾沙一、常以レ網取二螺蚌一傾二入珠池一、作レ爛淘レ珠爲レ用而貨也

蘇祿國　採二眞珠一、色白絕品、珠有二徑寸者一、已値七八百錠、中者二三百錠、永樂十六年其酋長感二慕聖恩一、乃挈レ妻携レ子涉レ海來朝進二獻巨珠一顆一、重七兩五錢

榜葛剌國　地產細布・撒哈剌……珊瑚・眞珠……

天方國　地產金珀・寶石・眞珠・獅子……

忽魯謨斯國　產有二眞珠一

というように、實際の記錄ははなはだ簡單である。しかも蘇祿國および天方國は後集におさめられている關係上、「後

集者採輯傳譯之所實也」であつて親しく實見したものではない。錫蘭山國・榜葛剌國・忽魯謨斯國は前集の部分にあるので、「前集者親監目識之所レ至也」（星槎勝覽序）であるにもかかわらず前掲のごとく具體性を缺いており、しかも錫蘭山の條は明らかに「島夷志略」の襲用と思われるのである。

以上五科目にわたつて概觀してきたが、これが「星槎勝覽」に記述された南海（一部にいわゆる當時の西洋も加わつている）に關する漁業のすべてである。

同書成立の事情からして漁業（狩猟についても同じことがいえるのであるが）に關する多くの記錄をもとめることが困難であろうけれど、これをそれ以前の同類文献にくらべるとき、物足りなさを感じることはやむをえまい。

(6) 考　察

既にわれ〳〵は宋の淳熙二年（一一七五）成立したと思われる范成大の「桂海虞衡志」によつて南海に關する豐富な知見を與えられた。著書が桂林において傳聞した資料にもとづいて輯成されたのであるが、魚貝に關しては、その「志虫魚」において

珠・車磲・蚺蛇*・蝳蝐・蜈蚣*・青螺・鸚鵡螺・貝子・石蟹・鬼蛺蝶*・黑蛺蝶*・嘉魚・蝦魚・竹魚・天蝦

（*印をのぞいたものが魚介類）

の記述があり、とくに合浦の眞珠採取に當時の眞珠生成論とでも稱する說が示され、さらに「志蠻」には水上生活の蜑に關して百語から成る記述もなされている。しかるに「星槎勝覽」では一個の魚介名を見出すことも困難なのである。

同じころ、正確にのべれば南宋の孝帝の淳熙五年（一一七八）周去非という人の著した「嶺外代答」、あるいは南宋

の理宗の寶慶元年（一二二五）にあらわされた趙如活「諸蕃誌」上巻―志國　下巻―志物においても、漁業に關するオリジナルな資料が各所におさめられている。

元代に至り、汪大淵が往訪目睹した南海諸國に關する「島夷誌略」が現れ、われ〳〵の知見は一層廣くなつた。成立は一三四九年ないし五〇年といわれているが、當時の漁業に關してまず滿足しうる資料が各所に認められ、同時に登載された國々もまたその數を增すに至つたのである。試みに「民煮レ海爲レ鹽」の海水鹽に關する地名をあげてみると

彭湖・三島・麻逸・無枝拔・交阯・占城・民多朗・眞臘・丹馬命・日麗・麻里噜・遐來物・彭坑・吉蘭丹・羅衛・羅斛・東冲古利・蘇洛鬲・針路・淡邈・尖山・八節那間・三佛齊・淳泥・明家羅・龍牙犀角・蘇門傍・舊港・龍牙善提・班卒・假里馬丁・文老古・東西竺・班達里・高郎步・東淡邈・大八丹・加將門里・波斯□・撻吉那・千里馬・須文那・放拜・大烏爹・萬年港・馬八兒嶼・俚伽塔・蒲奔

など、太平洋・インド洋の四十八カ國にわたり、「星槎勝覽」のあげた十四カ國をはるかにしのいでいる。そればかりか、ボルネオ西岸南部の一岬 Tanjang Datu を指すと思われる都督岸の條下に、鹽つくりの禁忌に關する習俗のあることを示し、

民間每以二正月三日一長幼焚レ香拜レ天以二酒牲一祭二山神一之後長幼皆羅拜二於庭一名爲二慶節一序不レ喜レ煮レ鹽

とのべているなど、比較にならぬくらいの差があるのである。

「島夷誌略」はなおいくつかの注目すべき資料を持つているが、例えば肉荳蔻の產地として知られた今の Banda isls.（文誕）の島民は日中の强烈な暑熱をさけて夕刻より漁猟に出ることを物語り、蘇祿現今のスウルー群島產眞珠のかなり詳しい價値を論じ、その他マルディーヴ群島の貝子についての記述、あるいはボルネオ東南岸蒲奔 Tana Bumbu

での

以二木板一爲レ舟、籐篾固レ之、以二棉花一塞二縫底一、甚柔軟隨レ波上下、蕩以レ木而爲レ槳、未二嘗見一損壞一

という構造船の萠芽を示す例など、いずれも注目するに價しよう。マルコ・ポーロあるいはマゼランの紀行にひつてきするというもあながち過言ではあるまい。

「誌略」と「星槎勝覽」の差は、セイロン眞珠漁業において最も明瞭に示されている。既述のように、「星槎勝覽」の錫蘭山國の條下では

其海傍有二珠簾沙一　常以レ網取二螺蚌一傾二入珠池內一　作レ爛淘レ珠爲用而貨也

の記述がなされているのであるが、これは「誌略」の第三港、藤田豐八博士の「島夷誌略校註」（雪堂叢刻一〇）によればセイロン島マナール灣沿岸の Puttalam 港付近に比定されるが、ともかく第三港に關する

去比港八十餘里、洋名大朗、蚌珠海內爲二最富一、採二取之一際、酋長殺二人及十數牲一、祭二海神一選レ日集二舟人一採取、每舟以二五人一爲レ率、二人盪槳、二人收綆、其一人用圈竹匡、其袋口懸二於頸上一。仍用收綆、繫二石於腰一放二墜海底一、以レ手爬二珠蚌一入二袋中一。遂執レ綆牽制、

其舟中之人收レ綆、人隨レ綆而上纔以二珠蚌一傾二舟中一、既滿載則官場週回皆官兵守レ之、越二數日一候、其肉腐爛則去二其殼一以レ羅盛二腐肉一旋轉洗レ之、則肉去珠存、仍巨細篩閱二於十分一中官抽二一半一以二五分一與二舟人均分一、若夫海神以取レ之入水者多葬二於鰐魚之腹一

云々という記事を抄襲し、しかもこれを誤解して自分勝手なものにしていることは明かである。

費信のいう網を以て螺蚌をとるというのは、ダイバー達が首からかけている網袋であつて、螺蚌をとるのは潛水作業

によつたのであろう。眞珠貝だけはいかにしても網具をもつてしては採取しえない。また費信がそれにつゞけて貝を池中に傾入し、これを腐爛せしめ珠をとるというのも臆測の一例で、「誌略」の文をちぢめる時に誤りをおかしたのであろう。「誌略」は數日經て腐爛した母貝から珠をとりだすことを記しながらも、その場所は明示していない。後年におけるセイロン島では大量の pearl oyster がくさるまで放置しておく圍いを設け、これを totties とよんでいるが、池中ではない。

「星槎勝覽」のセイロン眞珠漁に關する部分は右にのべたように信をおきかねるが、「島夷誌略」の記述はかなりの正確さをそなえている。一九二五年同島の眞珠海棚を訪れた B. S. Woolf は、翌年の The national geographical magazine XLIX-2, において、Fishing for Pearls in the Indian Ocean, と題するルポルタージュを寄せているが、それに示されたセイロン島眞珠漁業を「誌略」のそれとくらべてみても、漁に先立つて海神を祭るために牲をささげる習俗（島夷誌略）や、舳の高い採取船（英領時代 dhoneys とよばれた）の乘員が五人以上になつたこと、分配比率が官收⅔、潛水夫⅓の割合になつたことなどをのぞけば、操業から摘出、選別にいたるまで全く同一であることがわかり、改めて「島夷誌略」の資料的價値を認識させられるのである。

ウールフ氏が附圖で揭載した寫眞は、一九二五年ごろのセイロン眞珠漁業を示すが、潛水夫がノーズ・クリップを用いている。ウールフ氏の記述に從えば、これを用いるのはアラビア方面からの出稼漁民だけである。タミール人はクリップを用いず、人差指と親指を用いて鼻口を守るということである。「島夷誌略」はかかるクリップの存在についてふれていないので、當時の漁法はタミール的なものと推察されるが、これはセイロン島への大食系民族進出の歷史をいますこし檢討してみないと斷定はできない。またペルシャ灣系の潛水夫がノーズ・クリップによつて特色づけられてよい

ものかどうかも今後の問題である。ただ既にわれ〳〵は「桂海虞衡志」によつて宋代の支那蜑民がノーズ・クリップを使用しないことを知り、「諸蕃志」によつてアラブ系ダイバーが黃蠟で耳鼻をふさぐことも知つている。[註2]もし、かりに世界の潛水漁が

(1)　ペルシャ灣系　ノーズ・クリップないし黃蠟で耳鼻を塞ぐ
(2)　インド洋系　手指で鼻をふさぐ
(3)　東シナ海系　鼻をふさがない？

と三つの大別がなされるとしたら、「魏志倭人傳」以來のわが國潛水漁法は一體どの系譜をひいているのであろうか。潛水に命綱、錘石、浮具等を用いることは潛水の原理から發生するものであつて、タイプの基準にはならない。そこで分類がなされるとしたら、ノーズ・クリップのごときか或いは供犧のような習俗的なものがその有力な指標として選ばれねばならない。主題から外れたが、興味あることなので附言した。

以上「星槎勝覽」にとどめられた漁事を紹介し、それが既刊書の襲用による場合が多く、かつ内容のとぼしい點をのべ、それを明示するために「島夷誌略」との比較を試みたわけである。ただこの一事のみをもつてしてこの書の價値を否定するものではない。ヨーロッパ人東漸以前の西南海上の事情を明らかにするものとして、やはり重視しなくてはならぬ記錄も決してすくなくないからである。

註1　Mahdi Husain: The Reḥla of Ibn Battuta, Baroda 1953, p.198.

2　眞珠出二大食國之海島上一（中略）其採取人以二麻繩一繫レ身以二黃蠟一塞二耳鼻一